論文

中国語を母語とする日本語学習者の複文における主語の省略と非省略

言語教育研究科　言語教育学専攻

博士後期課程 3 年

劉　嘉

【キーワード】従属節の主語、従属節の内部要素、省略、非省略、日本語学習者

1　本研究の目的と構成

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、「日本語学習者」とする）がどのような場合に従属節の主語を省略し、どのような場合に従属節の主語を省略しないかを明らかにすることである。

日本語学習者は、(1) の下線部のように従属節の主語を省略することもあり、(2) の下線部のように従属節の主語を省略しないこともある。

(1)　そ、そしてかり、あー彼は、あー家の、そ、外からマリを呼んでいました、しかし、マリは、ぐっすり、寝ているので、きかー、きか、あー、聞かない、あ聞かなかった、あー、仕方がないのっで、ケンは、はしこを使って、家に、入りたい、入り、たか、帰りたいん、のっで、警察にはけんされました、あーす、あその時、マリは、めざ、めざましん、めざましーまし、えー目ざました、おん、<u>警察にー、解釈して、えー、ケン、ケンは家に、あーす、あー、ケンはやっと家に、入りました</u>

（「I-JAS」，CCH15，中級，「ストーリーテリング 2」，あいづちは省略）

(2)　調　　査　　者：小学校、中学校、高校、までで、好きだった先生、はいますか？

中国語母語話者：好きっだ先生はー、好きってゆうかー、尊敬したせん、尊敬している先生がいます

調　　査　　者：ほーほー、じゃその先生について、説明してください

中国語母語話者：その先生はー、えー、日本語ー翻訳をー、え、日本語翻訳の授業をー、えー、受けていました、え、そのせんせは、すごく、えー、すごいなーと、おも、思います、<u>その先生は、いつも、んー、文法の、分解、とかー、えー、日本語はどうし</u>

てこんな形になってるのかはー、え、詳しく説明してくれたので、その点は、ほんとにすごいなーと思います

（「I-JAS」，CCT13，中級，「対話」，あいづちは省略）

（1）の下線部では、この日本語学習者が言いたいのは、「マリが警察に説明して、ケンはやっと家に入ることができた」ということである。つまり、「警察にー、解釈[1]して」という継起を表す「て」節の主語は、「マリ（が）」である。また、この下線部の前文「その時、マリは、めざ、めざましん、めざましーまし、えー目ざました」の主題は、「マリ（は）」である。このように、従属節の主語と前文の主題が同じ場合、日本語学習者は従属節の主語を省略することがある。

（2）の下線部では、「その先生は、いつも、んー、文法の、分解、とかー、えー、日本語はどうしてこんな形になってるのかはー、え、詳しく説明してくれたので」という「ので」節の主語は、「その先生（は）」である。また、この下線部の前文「そのせんせ[2]は、すごく、えー、すごいなーと、おも、思います」の主題も、「その先生（は）」である。このように、従属節の主語と前文の主題が同じ場合、日本語学習者は従属節の主語を省略しないことがある。

日本語学習者は、（1）（2）のように、従属節の主語と前文の主題が同じ場合、従属節の主語を省略することもあり、省略しないこともある。本研究では、コーパスのデータを用いて、日本語学習者がどのような場合に従属節の主語を省略し、どのような場合に従属節の主語を省略しないかを調査する。また、日本語学習者の主語の省略・非省略の特徴を明らかにするため、日本語母語話者の主語の省略・非省略の状況についても調査する。

日本語の従属節は、付帯状況を表す「ながら」節のような内部に現れる要素が少ない従属節と、「とき」節のような内部に現れる要素が中程度の従属節、「けど」節のような内部に現れる要素が多い従属節という 3 種類に分けられている。従属節の内部に現れる要素からみた従属節の種類によって、従属節の主語を省略するかしないかが異なる。そのため、本研究では、従属節の種類別に、日本語学習者の従属節の主語の省略・非省略の状況を考察する。

本研究の構成は、次のとおりである。まず、2 で先行研究を概観する。次に、3 で本研究の立場を示し、4 で調査方法について説明する。続いて、5 から 7 で従属節の種類別に、日本語学習者がどのような場合に従属節の主語を省略するかしないかについて詳しく述べ

る。具体的には、5 で内部要素が少ない従属節、6 で内部要素が中程度の従属節、7 で内部要素が多い従属節を取り上げる。最後に、8 でまとめを行い、今後の課題について触れる。

2　先行研究

省略に関する先行研究は、談話における主題の省略を扱った研究がほとんどである。複文における従属節の主語の省略を扱った研究は非常に少ない。

談話における主題の省略を扱った研究は、日本語学の立場から扱ったものと、日本語教育学の立場から扱ったものがある。

日本語学の立場から談話における主題の省略を扱った研究としては、たとえば三上（1960）や久野（1978)、砂川（1990）がある。

三上（1960）では、(3）の例をとりあげ、「『X』がピリオド（マル、句点）を超えて、次々の文まで及んで行く」という「ハ」のピリオド超え現象が指摘されている。

(3)　父ハ茶ノ間ヘハハイラナカッタ。隣リノ間ニ座ッタ。　（三上 1960：117）

(3）では、前文の主題「父（ハ)」は、次の文「隣りの間に座った」まで及んで行く。そのため、次の文の主題「父（ハ)」は、省略されている。

久野（1978）では、主題省略の条件について述べられている。具体的に、主題の省略に関わる構文を「反復主題省略」「主語を先行詞とする主題省略」「新主題省略」「異主題省略」という 4 つのパターンに分け、それぞれの主題省略の条件を次の（4）（5）（6）（7）のように述べている。

(4)　「反復主題省略」：第一文と第二文の主題が同一である場合は、第二文の主題を省略できる。　（久野 1978：323）

(5)　「主語を先行詞とする主題省略」：「X ガ……。X ハ……。」の「X ハ」は省略できる。　（久野 1978：323）

(6)　「新主題省略条件」：「Y ガ……X……。X ハ……。」という二つの文の連続がある時、「X ハ」が省略できるのは、第一文も第二文も、X の目からみた記述（E^3（X）＝1）であるが、Y よりも X よりの視点からみた記述（1＞E（X）＞E（Y)）である場合に限られる。但し、E（X）の値が 1 に近ければ近い程、「X

ハ」の省略が容易になる。　（久野 1978 : 107）

（7）　「異主題省略条件」:「Y ハ……X……。X ハ……。」という二つの主題文の連続がある場合、「X ハ」が省略できるのは、話者の視点が Y のそれと完全に一致し（即ち E（Y）＝1）、第二文も Y の視点からの記述である場合に限られている。　（久野 1978 : 110）

砂川（1990）では、主題の省略と非省略という現象を手がかりにして、談話を構成するさいの主題の省略と「は」による主題提示の機能について考察されている。砂川（1990）によると、主題省略の構文的条件は、次の（8）（9）（10）のようなものである。

（8）　主題の指示物が直前の文で主語の位置を占めている

（9）　主題の指示物が主語の位置をしていなくても直前の分裂文で主語的な役割で表されている

（10）　直前の文で主題として明示されている

また、砂川（1990）では、主題非省略がおきる原因として二つの文の間に、次の（11）から（16）のようなものがあると述べられている。

（11）　他の登場人物の介在

（12）　脈絡の不整合

（13）　時空間的なギャップ

（14）　物語の語り手と書き手

（15）　語り様式の変化

（16）　書き手の変化の変化

日本語教育学の立場から談話における主題の省略を扱った研究としては、宮島（2018）や付（2020）、中西（2023）がある。

宮島（2018）は、主題の省略・非省略の条件について砂川（1990）の提案に基づき日本語学習者の作文の観察をもとに考察した。その観察に基づき、中上級日本語学習者に対し、主題省略をどのように指導するかについて提案している。宮島（2018）の提案をまとめる

と、(17)(18)(19)のようになる。

(17)　該当主題の指示物が直前の文の主題か主語と同じでなければ、主題は省略してはいけない。

(18)　(17)を満たしていても以下の場合、主題は省略してはいけない。①該当主題を含む文と直前の文が表す内容の間に、「時間的隔たりがあるか」「脈絡の途切れ」がある。②該当主題を含む文の述語が「見つけた」等の話題の転換を示す述語である

(19)　話し言葉では「私は」は省略してもよい。

付(2020)では、久野(1978)で検討したパターンの主題省略文が日本語学習者にどれほどの許容度があるかについて考察されている。付(2020)によると、日本語学習者にとって許容度が高いのは、「反復主題省略」と「主語を先行詞とする主題省略」である。一方、日本語学習者にとって許容度が低いのは、「新主題省略」と「異主題省略」である。

中西(2023)では、日本語学習者による主題の省略の実態と、なぜ日本語学習者が主題を省略するのかという使用意識について研究されている。同研究では、日本語学習者による主題の不自然な省略には、「既出のもの(主題)を省略する」と、「未出のもの(主題)を省略する」という2種類があると指摘されている。また、日本語学習者は「先行文脈で既出のものを反復して主題にする場合は省略できることがあるという規則」を過剰般化して、「わかってもらえそうな主題は省略してもよい」という意識で中間言語を作り出しているようであると述べられている。

一方、複文における従属節の主語の省略を扱った研究は少ないながらも、野田(2004)を挙げることができる。野田(2004)では、省略されている従属節の主語の捉えかたについて研究がなされ、主節[4]と従属節[5]からなりたつ複文の場合、従属節の主語が表面に現れていないときは、その主語は主節の主語と同じだと考えてよい場合が多いと指摘されている。

このように、主題の省略に関する研究は多いが、従属節の主語の省略に関する研究は非常に少ないことがわかる。また、日本語学習者が従属節の主語をどのような場合に省略するかしないかを明らかにした研究はほとんどないと言える。

3　本研究の立場

本研究の「複文」については、益岡（1997）の定義に従う。益岡（1997）によると、「複文」とは、述語を中心として組み立てられる構造体が複数個存在する文、すなわち、述語を中心としたまとまりが 2 つ以上集まって構成された文のことである。

本研究の「従属節」については、野田（2002）の「連用節」を指す。野田（2002）によると、連用節の多くは、（20）のように、述語を限定して拡張するものであるが、（21）のように、述語を並列して拡張するものもある。本研究では、（20）の下線部のような従属節も（21）の下線部のような従属節も扱う。

（20）　暖かくなったら、この種をまきましょう。　（野田 2002 : 11）

（21）　みんな賛成したが、ぼくは反対だった。　（野田 2002 : 11）

本研究の「従属節の種類」については、南（1974）と野田（2002）に基づいている。「従属節の種類」については、これまでさまざまな観点から研究が行われてきた。そのうち、代表的な研究は、南（1974）と野田（2002）である。南（1974）では、従属節の内部要素から、従属節の種類について研究がなされている。一方、野田（2002）では、従属節の内部に主題の現れかたや主語の現れかたから、従属節の種類について研究がなされている。この 2 つの研究では異なる観点から従属節の種類について研究されているが、従属節の種類はほぼ対応している。本研究では、南（1974）と野田（2002）に基づき、従属節を表 1 のように分類する。

表 1　本研究の従属節の種類

従属節の種類	従属節の例	南（1974）の分類	野田（2002）の分類
内部要素が少ない従属節	「ながら」節（付帯状況）、「ために」節（目的）	A 類	従属節[6]の主語[7]と主節[8]の主語を一致させなければならない従属節
内部要素が中程度の従属節	「とき」節、「ても」節	B 類	従属節の主語と主節の主語を一致させるのがふつうの従属節
内部要素が多い従属節	「けど」節、「が」節	C 類	従属節の主語と主節の主語を一致させなくてもよい従属節

表 1 について、内部要素が少ない従属節、内部要素が中程度の従属節、内部要素が多い

従属節という順番で説明する。

まず、内部要素が少ない従属節というのは、付帯状況を表す「ながら」節のような従属節である。この種類の従属節では、次の（22）のように、主語（「～が」）は現れない。また、主題（「～は」）も現れない。そのため、この種類の従属節をもつ複文に現れる主語は、従属節の主語ではなく、主節の主語である。たとえば、(23) の最初に現れる主語「私（は）」は、「ながら」節の主語ではなく、主節の主語である。日本語記述文法研究会（2009）では、「『省略』とは、文法上必要とされる格成分を発話から省くことで指示が行われることである」と述べられている。内部要素が少ない従属節は主語（「～が」）も主題（「～は」も文法上必要とされないため、従属節の主語の省略・非省略の問題にならない。

（22）　*純ちゃんがギターをひきながら、私は歌を歌った。　（野田 2002 : 50）

（23）　私はギターをひきながら、歌を歌った。　（(23) をもとにした筆者の作例）

次に、内部要素が中程度の従属節というのは、「たら」節のような従属節である。この種類の従属節では、（24）のように主題（「～は」）は現れないが、（25）のように主語（「～が」）は現れる。そのため、この種類の従属節をもつ複文に現れる主題は、従属節の主題ではなく、主節の主題である。たとえば、（26）の最初に現れる主題「山口製菓（は）」は、「ために」節の主題ではなく、主節の主題である。野田（2002）によると、この種類の従属節と主節の主語は一致させるのがふつうである。この種類の従属節の主語と主節の主語が一致している場合、（26）のように従属節の主語「山口製菓（が）」を省略するのがふつうである。

（24）　*水道の水はまずかったら、浄水器をつけるといいよ。　（野田 2002 : 50）

（25）　水道の水がまずかったら、浄水器をつけるといいよ。

（(25) をもとにした筆者の作例）

（26）　山口製菓は福島食品に商標権侵害で訴えられたために、新製品の発送を見送った。　（野田 2002 : 58）

最後に、内部要素が多い従属節というのは、「けど」節のような従属節である。この種類の従属節では、次の（27）のように主題（「～は」）も現れ、（28）のように主語（「～が」）

も現れる。この種類の従属節は、主節への従属度が低く、単文だと考えてもよい。そのため、従属節の主語を省略するかしないかは、単文の場合と同じだと考えてよい。

（27）　山口さんは3時に来るから、それまでには戻ります。　（野田 2002：51）

（28）　3時に山口さんが来るから、それまでには戻ります。　（野田 2002：51）

内部要素からみた従属節の種類によって、それぞれの種類の従属節の性質がかなり異なる。そのため、本研究では、従属節の種類別に、日本語学習者が従属節の主語をどのような場合に省略し、どのような場合に省略しないかについて考察する。

本研究の「主語」については、柴谷（1985、1989）の定義に従う。柴谷（1985、1989）は「主語」を次の（29）（30）のように規定している。

（29）　所有の「ある・いる」、「できる、わかる」など「～に～が」のパターンを取る動詞・形容詞を述語とする文の主語はニ格名詞句である。

（30）　それ以外の語を述語とする文の主語はガ格名詞句である。

4　調査方法

本研究では、コーパスのデータを用いて、日本語母語話者と日本語学習者がそれぞれどのような場合に従属節の主語を省略し、どのような場合に従属節の主語を省略しないかについて調査する。

この調査に使用した資料は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」（「I-JAS」）の対面調査の発話データである。対面調査の発話データは、「ストーリーテリング 1（『ピクニック』）」「ストーリーテリング 2（『鍵』）」「対話」「ロールプレイ 1（依頼）」「ロールプレイ 2（断り）」「絵描写」である。このように、「I-JAS」の発話データが豊富なタスクが含まれているため、多様な実例が見られると考えられる。調査対象者は、日本語母語話者 30 名と、中国語を母語とする日本語学習者 60 名である。中国語を母語とする日本語学習者 60 名のうち、日本語中級レベルの学習者が 30 名で、日本語上級レベルの学習者が 30 名である。日本語学習者の日本語レベルは、J−CAT[9]と SPOT[10]によるレベル判定が行われている。

本研究で取り上げる従属節は、表 2 のとおりである。表 2 の 3 種類の従属節は、それぞれ「I-JAS」発話データの中の日本語学習者 60 名の従属節使用数の多い順に示されている。

表 2　本研究で取り上げる従属節

従属節の種類	従属節
内部要素が少ない従属節[11]	「て」節（付帯状況）
	「ながら」節（付帯状況）
	「ために」節（目的）
内部要素が中程度の従属節	「て」節（継起）
	「とき」節
	「たら」節（継起）
内部要素が多い従属節	「が」節
	「けど」節

本研究の調査は、日本語母語話者の調査と日本語学習者の調査に分けて行った。

日本語母語話者の調査は、次のような手順で実施した。まず、「I-JAS」の発話データで日本語母語話者の複文を収集する。次に、収集した複文を従属節の種類別に分類する。具体的には、付帯状況を表す「ながら」節のような内部要素が少ない従属節、「とき」節のような内部要素が中程度の従属節、「が」節のような内部要素が多い従属節の 3 種類に分類する。最後に、日本語母語話者がそれぞれの種類の従属節の主語をどのような場合に省略し、どのような場合に省略しないかについて考察する。

日本語学習者の調査は、次のような手順で実施した。まず、「I-JAS」の発話データで日本語学習者の複文を収集する。次に、日本語母語話者と同様に、収集した複文を従属節の種類別に分類する。具体的には、内部要素が少ない従属節、内部要素が中程度の従属節、内部要素が多い従属節の 3 種類に分類する。最後に、日本語母語話者のそれぞれの種類の従属節の主語の省略・非省略の場合では、日本語学習者が従属節の主語を省略するかしないかについて考察する。ただし、日本語学習者の場合、従属節の主語の省略・非省略に関する不自然な文を産出する可能性が考えられるため、日本語母語話者に判断してもらう必要がある。そのため、日本語学習者の複文における主語の省略・非省略が自然かどうかを 3 名の日本語母語話者に判定してもらう。日本語母語話者に判定してもらうため、日本語学習者の原文にもとづき、(31) のような選択肢問題を作成する。

(31)　店長、申し訳ありませんが、最近私はちょっと忙しくなったので、バイトの日、一週間に二日になっていただけませんか？＿＿＿この二日一生懸命頑張りますので、少し他の人に頼んでよろしいでしょうか？

A. 私は［主語を省略しない］

B. ／　［主語を省略する］

C. 主語を省略しても省略しなくてもどちらでもよい

D. その他_____

（31）のような選択肢問題は、次の（32）の方法で作成した。

（32）　日本語学習者の原文の従属節の主語の部分を空欄にし、A・B・C・D の 4 つの選択肢を作成する。具体的には、従属節の主語を省略しない、従属節の主語を省略する、従属節の主語を省略してもしなくてもよい、その他[12]という 4 つの選択肢を作成する。

最後に、3 名の日本語母語話者に選択肢問題の答えを選択してもらう[13]。日本語母語話者 3 名のうち、2 名以上が日本語学習者の原文表現を選択した場合、日本語学習者の従属節の主語の省略・非省略は自然だと判定する。一方、2 名以上が日本語学習者の原文表現を選ばなかった場合、日本語学習者の従属節の主語の省略・非省略は不自然だと判定する。

5　内部要素が少ない従属節の場合

本節では、内部要素が少ない従属節の場合、日本語学習者が従属節の主語をどのぐらい表示しないかについて詳しく述べる。

野田（2002）によると、この種類の従属節の内部に独自の主語をもつことができない。この種類の従属節の主語が主節の主語と必ず同じであるため、従属節の主語はかならず削除される。本節では、付帯状況を表す「て」節と「ながら」節、目的を表す「ために」節をとりあげる。「I-JAS」の発話データで日本語母語話者と日本語学習者の使用状況を考察した結果は、表 3 のとおりである。

表 3　内部要素が少ない従属節における主語の表示と非表示の節数

	母語話者		上級学習者		中級学習者	
	非表示	表示	非表示	表示	非表示	表示
従属節の主語が主節の主語と同じ	129	0	160	0	139	0
従属節の主語が主節の主語と異なる	0	0	0	2	0	0
合計	129	0	160	2	139	0

表 3 から、次の（33）のことがわかった。

（33）　内部要素が少ない従属節の場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、ほとんどの場合、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を主節の主語と一致させ、従属節の主語を表示しない。

（33）について、日本語学習者の具体的な例を示して説明する。

次の（34）では、付帯状況を表す「ながら」節の主語は主節の主語と同じである。この上級学習者は、日本語母語話者と同様に、「ながら」節の主語を表示しない。

（34）　あー、彼らーは、あ、朝飯の支度をしている時、あーい、部屋に、彼の、飼った、犬は、います、あーそれから、あー、彼らは、地図を見ながら、遠足の準備をしています

（「I-JAS」，CCH37，上級,「ストーリーテリング 1」，あいづちは省略）

（34）の下線部では、「地図を見ながら」という付帯状況表す「ながら」節の主語も「彼ら（が）」であり、「それから、彼らは…遠足の準備をしています」という主節の主語も「彼ら（は）」である[14]。つまり、付帯状況を表す「ながら」節の主語と主節の主語が一致している。日本語母語話者は、付帯状況を表す「ながら」節の主語と主節の主語を常に一致させるため、「ながら」節の主語を常に表示しない。この日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「ながら」節の主語と主節の主語を一致させ、「ながら」節の主語「彼ら（が）」を表示しない。

6　内部要素が中程度の従属節の場合

本節では、内部要素が中程度の従属節の場合、日本語学習者がどのような場合に従属節の主語を省略し、どのような場合に従属節の主語を省略しないかについて詳しく述べる。

日本語では、内部要素が中程度の従属節の主語を省略するかしないかは、さまざまな要素に関わる。「I-JAS」で日本語母語話者のこの種類の主語の省略状況を調査した結果、従属節の主語を省略するかしないかは、主に次の（35）から（38）に関わることがわかった。

（35）　従属節の主語が主節の主語と同じか異なるか

（36）　従属節の主語が新出か既出か

（37）　従属節の主語が一人称か一人称ではないか

（38）　従属節の主語が前文の主題と同じか異なるか

（35）から（38）は、優先順に示している。すなわち、この中では、（35）がもっとも優先され、次に（36）、その後（37）、最後に（38）となる。たとえば、従属節の主語が主節の主語と同じ場合、その従属節の主語は新出か既出かに関係なく、省略されるのがふつうである。

ただし、内部要素が中程度の従属節には、内部要素が少ない従属節に近いものもあり、内部要素が多い従属節に近いものもある。そのため、この種類の従属節は、主語の省略・非省略の規則がまったく同じとは言えない。本節では、継起を表す「て」節と、「とき」節、継起を表す「たら」節を取り上げる。

6.1　継起を表す「て」節の場合

日本語母語話者と日本語学習者が継起を表す「て」節の主語をどのような場合に省略し、どのような場合に省略しないかについて、「I-JAS」の発話データを用いて調査した結果は、表 4 のとおりである。

表 4　継起を表す「て」節における主語の省略と非省略の節数

<table>
<tr><td colspan="4" rowspan="2"></td><td colspan="2">母語話者</td><td colspan="2">上級学習者</td><td colspan="2">中級学習者</td></tr>
<tr><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td></tr>
<tr><td colspan="4">従属節の主語が主節の主語と同じ</td><td>446</td><td>2</td><td>423</td><td>0</td><td>188</td><td>0</td></tr>
<tr><td rowspan="4">従属節の主語が主節の主語と異なる</td><td colspan="3">従属節の主語が新出</td><td>0</td><td>24</td><td>0</td><td>23</td><td>0</td><td>8</td></tr>
<tr><td rowspan="3">従属節の主語が既出</td><td colspan="2">従属節の主語が一人称</td><td>8</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>3</td><td>0</td></tr>
<tr><td rowspan="2">従属節の主語が一人称ではない</td><td>従属節の主語が前文の主題と同じ</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>0</td><td>8</td><td>6</td></tr>
<tr><td>従属節の主語が前文の主題と異なる</td><td>6</td><td>15</td><td>1</td><td>14</td><td>0</td><td>9</td></tr>
<tr><td colspan="4">合計</td><td>463</td><td>40</td><td>425</td><td>38</td><td>199</td><td>23</td></tr>
</table>

表 4 から、次の（39）から（41）がわかった。

（39）　継起を表す「て」節の主語が主節の主語と同じ場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略する。

（40）　継起を表す「て」節の主語が主節の主語と異なる場合、「て」節の主語が新出であれば、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略しない。

（41）　継起を表す「て」節の主語が主節の主語と異なる場合、「て」節の主語が既出のものであっても、前文の主題と異なれば、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略しないことが多い。

（39）（40）（41）について、日本語学習者の具体的な例を示して説明する。

次の（42）では、継起を表す「て」節の主語が主節の主語と同じである。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「て」節の主語を省略している。

（42）　朝、あいえ、夜、うちにかえようとしても、帰れませんでした、大声を、出して、マリを、起こそうと、していましたが、マリは、寝てい、て、いますので、おこりませんでした、梯子を使って、二階へ、上ろうとしていましたが、その様子は、警察に、警官に、不審人物だと思われて、えー、捕まれそうに、なりました、<u>その時に、その騒ぎに、起こされたマリさんは、警官さんに説明して、ケンさんを、助け、助けました</u>

（「I-JAS」，CCS24，上級，「ストーリーテリング 2」，あいづちは省略）

（42）の下線部では、「警官さんに説明して」という継起を表す「て」節の主語も「マリさん（が）」であり、「その騒ぎに、起こされたマリさんは…ケンさんを、助け、助けました」という主節の主語も「マリさん（は）」である[15]。つまり、「て」節の主語と主節の主語が同じである。継起を表す「て」節の主語と主節の主語が同じ場合、日本語母語話者は、「て」節の主語を省略し、主節の主語を文の最初に提示するのがふつうである。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「て」節の主語「マリさん（が）」を省略し、主節の主語「マリさん（は）」を文の最初に提示する。

次の（43）では、継起を表す「て」節の主語は主節の主語と異なる。また、この「て」

節の主語は新出である。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「て」節の主語を省略していない。

（43）　あのー、ケンは、自分の家に帰ったら、鍵ーを持っていないことに、きづいきづーいました、んーき気づく気づきました、それからそれであのー家の前にーマリを呼んでいました、しかしマリは、よくね、ていよよく寝、ていーるからケンさんの声は聞こえなかったんです、それからケンそれからケンさんは梯子あー梯子を運んであ運んできてー、あのーん自分の家の二階に、あがり、たかったんです、でもあのー立ち寄った警官が、気が付い、気が付いんー気が付いてーあの、「やめなさい」と呼ばれ呼ば、らうーよばられました

（「I-JAS」，CCH42，中級，「絵描写」，あいづちは省略）

（43）の下線部では、「立ち寄った警官が、気が付い、気が付いんー気が付いて」という継起を表す「て」節の主語は「警官（が）」であり、「「やめなさい」と呼ばれ呼ば、らうーよばられました」という主節の主語は「ケンさん（は）」である[16]。つまり、「て」節の主語と主節の主語が異なる。また、「て」節の主語「警官（が）」は、新出である。「て」節の主語が主節の主語が異なり、「て」節の主語が新出の場合、日本語母語話者は、「て」節の主語を省略しない。新出の主語を省略しないという点では、この中級日本語学習者は日本語母語話者と同様である。ただし、「て」節の主語を主節の主語と一致させるという点では、この中級日本語学習者は日本語母語話者と異なる。「警官に気づかれて、やめなさいと言われた」のように、「気づかれる」という受身形を使うことによって、「て」節の主語を主節の主語と一致させたほうが自然である。

次の（44）では、継起を表す「て」節の主語は主節の主語と異なる。また、この「て」節の主語は前文の主題とも異なる。この中級日本語学習者は、「て」節の主語を省略していない。

（44）　んー、んーんー、ケンは、ん、ベルに押して、マリ、んー、んーマリがど、ドア、を開け、てほしい、マリに、マリにドアが開けてほしい、でもマリが寝て、いたので、んーベルが、んー聞こえ、ませんでした、あー、あーその後ケンは、うーマリ、に呼んで、でも、あマリが、あー聞こえ、ませんでし

た、んーそして、ケン、ケンはあー梯子で二階の窓から入りたいと思って、その時、警官、にとまられ、ました、んー、んその時、んマリがんー起きて、んーけいさ、ん警官に説明して、んー、うー、け、ケンは、大丈夫でした

（「I-JAS」，CCH20，中級，「ストーリーテリング 2」，あいづちは省略）

（44）の下線部では、「その時、んマリがんー起きて、んーけいさ、ん警官に説明して」という継起を表す「て」節の主語は「マリ（が）」であり、「んー、うー、け、ケンは、大丈夫でした」という主節の主語は「ケン（は）」である。つまり、「て」節の主語と主節の主語が異なる。また、この下線部の前文の主題は、「ケン（は）」である。このように、「て」節の主語が主節の主語が異なり、「て」節の主語が新出の場合、日本語母語話者は、「て」節の主語を省略しない。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「て」節の主語を省略していない。

ただし、表 4 に示したように、「て」節の主語が主節の主語と異なり、前文の主題とも異なる場合、日本語母語話者は従属節の主語を省略する例が 6 例ある。この 6 例は、次の（45）のように、従属節の主語がすべて先行文脈で出現しており、省略されても先行文脈から復元できる。

（45）では、継起を表す「て」節の主語は主節の主語と異なる。また、この「て」節の主語は前文の主題とも異なる。この日本語母語話者は、「て」節の主語を省略している。

（45）　調　　査　　者：印象に残った先生ってゆうのはいますか？

日本語母語話者：小学校ちゅう、あー

調　　査　　者：うん、学生の時

日本語母語話者：そうですね、あの、高校の時、の、先生、二年生三年生おんなじ担任の先生だったんですけど、数学の先生で、私数学が大の苦手で｛笑｝、大学ー受験も数学がネックだったんですけど、もう、受験期ーに、もう毎日のように放課後職員室に押しかけて、先生にわからないところを教えてもらって、まあ、私とお友達と、二人で通ってたんですけど、もうストーカーって言われてて｛笑｝でもあのほんと熱心に教えてくださって、先生のおかげで大学に入れたような

ものだなーと

調　　査　　者：おーそれはどんな、どんな先生なんですか？

（「I-JAS」，JJJ08，「会話」，あいづちは省略）

（45）の下線部では、「でもあのほんと熱心に教えてくださって」という継起を表す「て」節の主語は「先生（が）」であり、「先生のおかげで大学に入れたようなものだなーと」という主節の主語は「私（は）」である[17]。つまり、「て」節の主語と主節の主語が異なる。また、この下線部の前文の主題は、「私とお友達（は）」である。つまり、「て」節の主語と前文の主題も異なる。この（45）が「印象に残っている先生」の話であるため、「て」節の主語「先生（が）」はすでに先行文脈で出現している。また、「て」節では、「教えてくださって」という方向性を表す表現が使われている。そのため、「て」節の主語「先生（が）」は省略されても、先行文脈から復元できる。このように、「て」節の主語が主節の主語と異なり、前文の主題とも異なる場合、「て」節の主語が先行文脈から復元できるため、この日本語母語話者は「て」節の主語を省略している。

6.2　「とき」節の場合

日本語母語話者と日本語学習者が「とき」節の主語をどのような場合に省略し、どのような場合に省略しないかについて、「I-JAS」の発話データを用いて調査した結果は、表 5 のとおりである。

表 5　「とき」節における主語の省略と非省略の節数

<table>
<tr><td colspan="4" rowspan="2"></td><td colspan="2">母語話者</td><td colspan="2">上級学習者</td><td colspan="2">中級学習者</td></tr>
<tr><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td></tr>
<tr><td colspan="4">従属節の主語が主節の主語と同じ</td><td>28</td><td>0</td><td>37</td><td>0</td><td>45</td><td>0</td></tr>
<tr><td rowspan="4">従属節の主語が主節の主語と異なる</td><td colspan="3">従属節の主語が新出</td><td>0</td><td>6</td><td>0</td><td>3</td><td>0</td><td>6</td></tr>
<tr><td rowspan="3">従属節の主語が既出</td><td colspan="2">従属節の主語が一人称</td><td>5</td><td>0</td><td>3</td><td>1</td><td>4</td><td>3</td></tr>
<tr><td rowspan="2">従属節の主語が一人称ではない</td><td>従属節の主語が前文の主題と同じ</td><td>3</td><td>2</td><td>5</td><td>3</td><td>5</td><td>10</td></tr>
<tr><td>従属節の主語が前文の主題と異なる</td><td>0</td><td>4</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>11</td></tr>
<tr><td colspan="4">合計</td><td>36</td><td>12</td><td>46</td><td>9</td><td>57</td><td>30</td></tr>
</table>

表 5 から、次の（46）から（49）がわかった。

（46）　「とき」節の主語が主節の主語と同じ場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略する。

（47）　「とき」節の主語が主節の主語と異なる場合、「とき」節の主語が新出であれば、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略しない。

（48）　「とき」節の主語が主節の主語と異なる場合、「とき」節の主語が既出の一人称であっても、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略しないことがある。また、中級日本語学習者は上級日本語学習者より、従属節の主語を省略しない傾向が強い。

（49）　「とき」節の主語が主節の主語と異なる場合、「とき」節の主語が一人称ではなく、前文の主題とも異なれば、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、ほとんどの場合、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略しない。

（46）から（49）について、日本語学習者の具体的な例を示して説明する。

次の（50）では、「とき」節の主語が主節の主語と同じである。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「とき」節の主語を省略している。

（50）　ケンは、チャイムを、鳴らしたけど、マリはぐっすり寝ていました、なので、ケンは梯子で二階へ上ろうとした時、警察に、泥棒だと間違われました

（「I-JAS」，CCT07，上級，「ストーリーテリング 2」，あいづちは省略）

（50）の下線部では、「梯子で二階へ上ろうとした時」という「とき」節の主語は「ケン（が）」であり、「ケンは…警察に、泥棒だと間違われました」という主節の主語は「ケン（は）」である[18]。つまり、「とき」節の主語と主節の主語が同じである。このように、「とき」節の主語と主節の主語が同じ場合、日本語母語話者は、「とき」節の主語「～が」を省略し、主節の主語「～は」を文の最初に提示するのがふつうである。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「とき」節の主語「ケン（が）」を省略し、主節の主語「ケン（は）」を文の最初に提示する。

次の（51）では、「とき」節の主語は主節の主語と異なる。また、「とき」節の主語は新

出である。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「とき」節の主語を省略していない。

（51）　調　　査　　者：じゃあやっぱり田舎ーより、都会がいんですねー？
中国語母語話者：はーい
（略）
中国語母語話者：いろいろな、不便、不便のことがありまっす
調　　査　　者：不便だから辛いんですかー？
中国語母語話者：はーい
調　　査　　者：ふーん、いちばーん辛いなーと感じるのはどんな点なんですか？
中国語母語話者：道のは、悪いんです、雨が降る時、道はとでも悪いんです、はい
（「I-JAS」，CCH36，中級，「対話」，あいづちは省略）

（51）の下線部では、「雨が降る時」という「とき」節の主語は「雨（が）」であり、「道はとでも悪いんです」という主節の主語は「道（は）」である。つまり、「とき」節の主語と主節の主語が異なる。また、「とき」節の主語「雨（が）」は、新出である。このように、「とき」節の主語と主節の主語が異なる場合、「とき」節の主語が新出であれば、日本語母語話者は、「とき」節の主語を省略しない。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「とき」節の主語「雨（が）」を省略していない。

次の（52）では、「とき」節の主語は主節の主語と異なる。また、この「とき」節の主語が既出の一人称である。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、「とき」節の主語を省略していない。

（52）　調　　査　　者：今まででー、とっても、辛かったこと、悲しかったこと？、怖かった、「きゃー」とか、そうゆう話が、嫌な話を一つ、だけ教えてください
中国語母語話者：はい、私は大学に入って時ー、そのクラスメートはみんな、成績、がー、すごいです

（「I-JAS」，CCH56，中級，「対話」，あいづちは省略）

（52）の下線部の「私は大学に入って時ー」という「とき」節の主語「私」は、「は」で表示されている。この「はは、「が」の誤りだと思われる。3 で述べたように、内部要素が中程度の従属節で主題（「～は」）が現れないため、この種類の従属節に現れる主題は、従属節の主題ではなく、主節の主題である。しかし、（52）の下線部の「そのクラスメートはみんな、成績、がー、すごいです」という主節の主題は、「そのクラスメート（は）」である。つまり、この中級日本語学習者が言いたいのは、「私が大学に入ったとき、クラスメートはみんな成績がすごかった」ということである。このように考えると、「私は大学に入って時ー」の「は」は、「が」の誤りである[19]。このように、「とき」節の主語「私（が）」と主節の主語「そのクラスメート（は）」が異なる。また、下線部の先行文脈では、この中級日本語学習者は、調査者に今まで自分の辛かったことや悲しかったことについて聞かれている。つまり、下線部の「とき」節の主語「私（が）」は、既出である。このように、「とき」節の主語と主節の主語が異なる場合、「とき」節の主語が既出の一人称であれば、日本語母語話話者は、「とき」節の主語を省略する。しかし、この中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、「とき」節の主語「私（が）」を省略していない。この「とき」節の主語「私（が）」を省略するかしないかを日本語母語話者に判定してもらった結果、（53）のように「私（が）」を省略したほうが自然だということがわかった。

（53）　大学に入った時、クラスメートはみんな成績がすごかったです。[20]

次の（54）では、「とき」節の主語は主節の主語と異なる。また、この「とき」節の主語は一人称ではなく、前文の主題とも異なる。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「とき」節の主語を省略していない。

（54）　彼らは、今日は、郊外の、くす、芝生に、ピクニックに行くつもりでした、｛咳｝あん彼らの小さい犬はす、あー彼らのあん、部屋に、歩きま、ました、あん、あん、<u>ケンとマリは地図を読んでいる時、あん、犬は、彼らのバスケットに、あん、飛び込んで、いまいました</u>

（「I-JAS」，CCH19，中級，「ストーリーテリング 1」，あいづちは省略）

（54）の下線部の「ケンとマリは地図を読んでいる時」という「とき」節の主語「ケンとマリ」は、「は」で表示されている。この「は」は、「が」の誤りだと思われる。3 で述べたように、内部要素が中程度の従属節で主題（「～は」）が現れないため、この種類の従属節に現れる主題は、従属節の主題ではなく、主節の主題である。しかし、（54）の下線部の「犬は、彼らのバスケットに、あん、飛び込んで、いまいました」という主節の主題は、「犬（は）」である。つまり、この中級日本語学習者が言いたいのは、「ケンとマリが地図を見ている時、犬がバスケットの中に入り込んでしまった」ということである。このように考えると、「ケンとマリは地図を読んでいる時」の「は」は、「が」の誤りである。このように、「とき」節の主語「ケンとマリ（が）」と主節の主語「犬（は）」が異なる。また、下線部の前文「彼らの小さい犬はす、あー彼らのあん、部屋に、歩きま、ました」の主題は、「彼らの小さい犬（は）」である。つまり、「とき」節の主語と前文の主題が異なる。このように、「とき」節の主語と前文の主題が異なる場合、「とき」節の主語が一人称ではなく、前文の主題と異なれば、日本語母語話者は、「とき」節の主語を省略しない。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「とき」節の主語を省略していない。

6.3　継起を表す「たら」節の場合

日本語母語話者と日本語学習者が継起を表す「たら」節の主語をどのような場合に省略し、どのような場合に省略しないかについて、「I-JAS」の発話データを用いて調査した結果は、表 6 のとおりである。

表 6　継起を表す「たら」節における主語の省略と非省略の節数

<table>
<tr><td colspan="4" rowspan="2"></td><td colspan="2">母語話者</td><td colspan="2">上級学習者</td><td colspan="2">中級学習者</td></tr>
<tr><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td></tr>
<tr><td colspan="4">従属節の主語主節の主語と同じ</td><td>10</td><td>0</td><td>28</td><td>0</td><td>21</td><td>0</td></tr>
<tr><td rowspan="4">従属節の主語主節の主語と異なる</td><td colspan="3">従属節の主語が新出</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>2</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td rowspan="3">従属節の主語が既出</td><td colspan="2">従属節の主語が一人称</td><td>12</td><td>2</td><td>8</td><td>2</td><td>3</td><td>0</td></tr>
<tr><td rowspan="2">従属節の主語が一人称ではない</td><td>従属節の主語が前文の主題と同じ</td><td>1</td><td>0</td><td>8</td><td>2</td><td>2</td><td>4</td></tr>
<tr><td>従属節の主語が前文の主題と異なる</td><td>1</td><td>0</td><td>5</td><td>2</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td colspan="4">合計</td><td>24</td><td>2</td><td>49</td><td>8</td><td>26</td><td>4</td></tr>
</table>

表 6 から、次の（55）（56）がわかった。

（55）　継起を表す「たら」節の主語が主節の主語と同じ場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略する。

（56）　継起を表す「たら」節の主語が主節の主語と異なる場合、「たら」節の主語が既出の一人称であれば、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略することが多い。

（55）（56）について、日本語学習者の具体的な例を示して説明する。

次の（57）では、継起を表す「たら」節の主語が主節の主語と同じである。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「たら」節の主語を省略している。

（57）　うちに帰、ったら、自分は、えーケンを持って、いません、あー、と気づきました

（「I-JAS」，CCH12，上級，「ストーリーテリング 2」，あいづちは省略）

（57）の下線部では、「うちに帰、ったら」という継起を表す「たら」節の主語も「自分（が）」であり、「自分は、えーケン[21]を持って、いません、あー、と気づきました」という主節の主語も「自分（は）」である。つまり、「たら」節の主語と主節の主語が同じである。このように、「たら」節の主語と主節の主語が同じ場合、日本語母語話者は、「たら」節の主語を省略する。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「たら」節の主語「自分（が）」を省略している。

次の（58）では、継起を表す「たら」節の主語は主節の主語と異なる、また、この「たら」節の主語は既出の一人称である。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「たら」節の主語を省略している。

（58）　中国語母語話者：でも、あー七歳の誕生日は、えー一年生の先生は私に鉛筆に、えー鉛筆かいてくれました、あっしはすごく嬉しかった、かったです

調　　査　　者：はい

中国語母語話者：えーうちの帰ったら、お母さんにい、お母さんに言って、「これは、これは先生のそ、このはこれは先生プレゼントで、ですよ」と、と言ったら、お母さんは、お母さん、お母さんはすごくびっくりしちゃ、あーしまいました

（「I-JAS」，CCH02，中級，「対話」，あいづちは省略）

（58）の下線部では、「「これは、これは先生のそ、このはこれは先生プレゼントで、ですよ」と、と言ったら」という継起を表す「たら」節の主語は「私（が）」であり、「お母さんは、お母さん、お母さんはすごくびっくりしちゃ、あーしまいました」という主節の主語は「お母さん（は）」である。つまり、継起を表す「たら」節の主語と主節の主語が異なる。また、この下線部の文脈では、この中級日本語学習者は、自分の 7 歳の誕生日のことについて話している。つまり、下線部の「たら」節の主語「私（が）」は、既出である。このように、継起を表す「たら」節の主語と主節の主語が同じ場合、「たら」節の主語が既出の一人称であれば、日本語母語話者は、「たら」節の主語を省略することが多い。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「たら」節の主語を省略している。

7　内部要素が多い従属節の場合

本節では、内部要素が多い従属節の場合、日本語学習者がどのような場合に従属節の主語を省略し、どのような場合に従属節の主語を省略しないかについて詳しく述べる。

日本語では、内部要素が多い従属節の主語を省略するかしないかは、いろいろな要素にかかわる。今回「I-JAS」で日本語母語話者のこの種類の主語の省略状況を調査した結果、従属節の主語を省略するかしないかは、主に次の（59）（60）（61）にかかわることがわかった。

（59）　従属節の主語が前文の主題と同じか異なるか

（60）　従属節の主語が新出か既出か

（61）　従属節の主語が一人称か一人称ではないか

この中では、優先順に上から、（59）、（60）、（61）となる。たとえば、従属節の主語が前文の主題と同じ場合、その従属節の主語は新出か既出かに関係なく、省略されるのがふつ

うである。（59）（60）（61）に示したように、内部要素が多い従属節の主語を省略するかしないかに関わる要素は、6 で述べた内部要素が中程度の従属節と異なる。また、これらの要素の優先順位も、内部要素が中程度の従属節と異なる。それはなぜかというと、内部要素が多い従属節は、単文に近いためである。つまり、内部要素が多い従属節の主語を省略するかしないかは、単文の場合と同じで、前文の主題との関係が強いと考えられる。

今回「I-JAS」で日本語母語話者の主語の省略状況を調査した結果、内部要素が多い従属節の主語の省略・非省略に関わるもっとも重要な要素は、従属節の主語が前文の主題と同じか異なるかであるという結論が得られた。これは、2 で述べた三上（1960）や久野（1978）、砂川（1990）の結果の一部を実証的に明らかにしたものと考えられる。

本節では、「が」節と「けど」節をとりあげる。「I-JAS」の日本語母語話者発話データの中も上級日本語学習者の発話データの中も中級日本語学習者の発話データの中も、この 2 つの従属節が非常に多い。そのため、この 2 つの従属節を考察するとき、日本語母語話者・上級日本語学習者・中級日本語学習者の発話データから、それぞれ「が」節を 40 節、「けど」節を 40 節任意に抽出した。考察した結果は、表 7 のとおりである。

表 7　内部要素が多い従属節における主語の省略と非省略の節数

<table>
<tr><td colspan="4" rowspan="2"></td><td colspan="2">母語話者</td><td colspan="2">上級学習者</td><td colspan="2">中級学習者</td></tr>
<tr><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td><td>省略</td><td>非省略</td></tr>
<tr><td colspan="4">従属節の主語が前文の主題と同じ</td><td>31</td><td>2</td><td>27</td><td>5</td><td>20</td><td>9</td></tr>
<tr><td rowspan="4">従属節の主語が前文の主題と異なる</td><td colspan="3">従属節の主語が新出</td><td>0</td><td>25</td><td>0</td><td>12</td><td>2</td><td>13</td></tr>
<tr><td rowspan="3">従属節の主語が既出</td><td colspan="2">従属節の主語が一人称</td><td>15</td><td>0</td><td>14</td><td>6</td><td>11</td><td>8</td></tr>
<tr><td rowspan="2">従属節の主語が一人称ではない</td><td>従属節の主語が前節の主語と同じ</td><td>2</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td></tr>
<tr><td>従属節の主語が前節の主語と異なる</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>6</td><td>2</td><td>10</td></tr>
<tr><td colspan="4">合計</td><td>48</td><td>27</td><td>43</td><td>29</td><td>36</td><td>40</td></tr>
</table>

表 7 から、次の（62）（63）（64）のことがわかった。

（62）　内部要素が多い従属節の主語が前文の主題と同じ場合、上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、従属節の主語をほとんど省略する。一方、この場合、中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略しないことが一定数ある。

（63）　内部要素が多い従属節の主語が前文の主題と異なり、また、従属節の主語が新出の場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、ほとんどの場合、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略しない。

（64）　内部要素が多い従属節の主語が前文の主題と異なる場合、従属節の主語が既出の一人称であっても、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略しないことがある。

（62）（63）（64）について、日本語学習者の具体的な例を示して説明する。

次の（65）では、「けど」節の主語は前文の主題と同じである。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、「けど」節の主語を省略していない。

（65）　調　　査　　者：何かこう有名な所があるんですか？
中国語母語話者：えー広州の、んー広州のえん、西う泉？
調　　査　　者：ん？
中国語母語話者：西、広州のシーフーという、とこ
調　　査　　者：シーフーという所、西の湖と書く所ですか
中国語母語話者：はい
調　　査　　者：西湖？へーここはあのすごく有名な場所ですか？
中国語母語話者：はい有名です
調　　査　　者：へーあのー湖なんですね、どんな湖ですか？大きいんですか？
中国語母語話者：ゆ、湖はそんなに、あーんきれいではありませんですけど、あの、こうそ、そのこ、所の、あー歴史が古い
（「I-JAS」，CCH22，中級，「対話」，あいづちは省略）

（65）の下線部では、「湖はそんなに、あーんきれいではありませんですけど」という「けど」節の主語は、「湖（は）」である。また、その前の文「大きいんですか」の主題も、「湖（は）」である[22]。つまり、「けど」節の主語と前文の主題が同じである。このように、「けど」節の主語と前文の主題が同じ場合、日本語母語話者は、「けど」節の主語を省略する。しかし、この中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、「けど」節の主語「湖（は）」

を省略していない。この「けど」節の主語「湖（は)」を省略するかしないかを日本語母語話者に判定してもらった結果、(66）のように「湖（は)」を省略したほうが自然だということがわかった。

（66）　そんなにきれいではないですけど、歴史が古いです。

次の（67）では、「が」節の主語は前文の主題と異なる。また、この「が」節の主語は新出である。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「が」節の主語を省略していない。

（67）　調　　査　　者：新しいうちに住むとしたらー、十年後、二十年後ですよー、田舎とー、都会とー、どちらに住みたいと思いますか？

中国語母語話者：うーん、たぶん、都会だと思います

調　　査　　者：どうしてですかー？

中国語母語話話者：便利ー、な生活ー、が、好きです

（略）

中国語母語話者：後、虫が嫌いなのでー、ちょっと

（略）

調　　査　　者：じゃあもう田舎が、ほんとにもう、嫌な、原因ってゆうのは、虫ですか

中国語母語話者：はい、そうなんです｛笑｝、はい、<u>後、今ーの、ところーは、とっかいのい、都会と田舎の、間なんですけど、ちょっとー、不便、不便な、ところも、あるしー、あんまりー、好きじゃなかったので、もっと、都会の、ほうに、する、住みーたいなーと思います</u>

（「I-JAS」，CCT24，上級，「対話」，あいづちは省略）

（67）の下線部では、「今ーの、ところーは、とっかいのい、都会と田舎の、間なんですけど」という「けど」節の主語は、「今のところ（は)」[23]である。その前の文「じゃあもう田舎が、ほんとにもう、嫌な、原因ってゆうのは、虫ですか」の主題は、「田舎が嫌な原因

（は)」である。つまり、「けど」節の主語と前文の主題が異なる。また、下線部の「けど」節の主語「今のところ（は)」は、新出である。このように、「けど」節の主語と前文の主題が異なる場合、「けど」節の主語が新出であれば、日本語母語話者は、「けど」節の主語を省略しない。この上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、「けど」節の主語「今のところ（は)」を省略していない。

次の（68）は、「が」節の主語は前文の主題と異なる。また、この「が」節の主語は既出の一人称である。この中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略していない。

（68）　調　　査　　者：これからはねちょっと将来の一あの楽しい話を怖くない話をしていきたいんですけどーえっと将来の夢は､何ですか？

中国語母語話者：んー私は日本に行きたいですがーあの比較文化比較文化に興味があります、中国の文化と日本の文化

調　　査　　者：あそうなんですか、じゃあえと、比較文化を比較してこういろいろ研究したいんですか？

中国語母語話者：うんはい

調　　査　　者：へーあそうなんですかー、わかりましたなんか計画がありますか？どこの大学、で勉強してーとか

中国語母語話者：あのんー有名な大学に入りたいです、が、でもあのチャンスはほとんどありません

（「I-JAS」，CCH42，中級，「対話」，あいづちは省略）

（68）の下線部では、「私は日本に行きたいですが」という「が」の主語は、「私（は)」である。その前の文「将来の夢は、何ですか？」の主題は、「将来の夢（は)」である。つまり、「が」節の主語と前文の主題が異なる。また、この（68）が中級日本語学習者の将来の夢についての話であるため、下線部の「が」節の主語「私（は)」は、既出である。ここの「私（は)」は、下線部の前文に主語や主題として出現していない。このように、「が」節の主語と前文の主題が異なるが、既出の一人称であれば、日本語母語話者は、「が」節の主語を省略する。しかし、この中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、「が」節の主語を省略していない。この「が」節の主語「私（は)」を省略するかしないかを日本語母

語話者に判定してもらった結果、(69) のように「私（は)」を省略したほうが自然だということがわかった。

(69)　日本に行きたいんですが、なかなかチャンスがありません。[24]

8　まとめと今後の課題

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者が従属節の主語をどのような場合に省略し、どのような場合に省略しないかについて、「I-JAS」の日本語学習者発話データを用いて調査した。また、日本語学習者の主語の省略・非省略の特徴を明らかにするするため、同じコーパスの日本語母語話者の発話データを用いて、日本語母語話者の主語の省略・非省略についても調査した。

内部要素が少ない従属節を調査した結果、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、ほとんどの場合、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を表示しないということがわかった。

内部要素が中程度の従属節を調査した結果、次の（70）から（73）のことがわかった。

(70)　内部要素が中程度の従属節の主語が主節の主語と同じ場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略する。

(71)　内部要素が中程度の従属節の主語が主節の主語と異なる場合、従属節の主語が新出であれば、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略しない。

(72)　「とき」節の主語が主節の主語と異なり、「とき」節の主語が一人称ではなく、前文の主題と異なる場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略することがある。

(73)　「とき」節と継起を表す「たら」節の主語が主節の主語と異なる場合、従属節の主語が既出の一人称であっても、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略しないことがある。

内部要素が多い従属節を調査した結果、次の（74）から（76）のことがわかった。

（74）　内部要素が多い従属節の主語が前文の主題と同じ場合、上級日本語学習者は、日本語母語話者と同様に、従属節の主語をほとんど省略する。一方、この場合、中級日本語学習者は、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略しないことが一定数ある。

（75）　内部要素が多い従属節の主語が前文の主題と異なり、また、従属節の主語が新出の場合、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、ほとんどの場合、日本語母語話者と同様に、従属節の主語を省略しない。

（76）　内部要素が多い従属節の主語が前文の主題と異なる場合、従属節の主語が既出の一人称であれば、上級日本語学習者も中級日本語学習者も、日本語母語話者と異なり、従属節の主語を省略しないことがある。

今後の課題として、（77）のようなことが考えられる。

（77）　他の言語を母語とする日本語学習者がどのような場合に従属節の主語を省略し、どのような場合従属節の主語をしないかについて考察する必要がある。

注

[1] この中級日本語学習者は「解釈」と言ったが、「説明」の誤りだと思われる。
[2] この中級日本語学習者は「そのせんせ」と言ったが、「その先生」だと思われる。
[3] E は Empathy の略であり、共感と訳される。久野（1978）では、「文中の名詞句の X 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感」と述べられている。また、「その度合、即ち共感度を E（x）で表わす。共感度は、値 0（客観描写）から値 1（完全な同一視化）迄の連続体である」と述べられている。
[4] 野田（2004）では「主文」と呼ばれているが、本研究では便宜的に「主節」と呼ぶ。以下同。
[5] 野田（2004）では「節」と呼ばれているが、本研究では便宜的に「従属節」と呼ぶ。以下同。
[6] 野田（2002）では「節」と呼ばれているが、本研究では便宜的に「従属節」と呼ぶ。以下同。
[7] 野田（2002）では「主格」と呼ばれているが、本研究では便宜的に「主語」と呼ぶ。以下同。
[8] 野田（2002）では「主文」と呼ばれているが、本研究では便宜的に「主節」と呼ぶ。以下同。
[9] J−CAT（Japanese Computerized Adaptive Test）は、日本語学習者を対象とした日本語能力の判定をインターネット上で実施できるテストであり、「聴解」「文字・語彙」「文法」「読解」の 4 つのセクションから構成されている。
[10] SPOT（Simple Performance-Oriented Test）は、短時間で日本語運用力を測定できるテストであり、実際に使える能力を推定する目的で作られている。
[11]内部要素が少ない従属節については、主語の省略・非省略の問題にならないと述べたが、日本語学習者が原則どおりこの種類の従属節の主語を表示しないかということを知りたいため、この種類の従属節についても調査する。
[12]「その他」を選んだ場合は、具体的な回答例を記述してもらった。
[13] 日本語母語話者が日本語学習者の原文の意味がわからないとき、調査者である筆者は随時その意味を説明する。
[14] 野田（1996）によると、付帯状況を表す「ながら」節のような従属節の内部に「は」も「が」も現れない。そのため、（39）の下線部の「彼らは」は、「ながら」節の主語ではなく、主節の主語である。
[15] 野田（1996）によると、継起を表す「て」節のような従属節に「は」は現れない。そのため、（47）の下線部の「マリさんは」は、「て」節の主語ではなく、主節の主語である。
[16] この中級日本語学習者は、主節の主語「ケンさん（は）」を省略している。
[17] この日本語母語話者は、主節の主語「私（は）」を省略している。
[18] 野田（1996）によると、「とき」節のような従属節の内部に「は」は現れない。そのため、（55）の下線部の「ケンは」は、「とき」節の主語ではなく、主節の主語である。
[19] 本研究では、日本語学習者の「は」と「が」の使い分けの問題は認められる。しかし、「は」と「が」の使い分けを明らかにすることが本研究の目的ではないため、ここでは、従属節の主語の省略・非省略の問題だけを取り上げる。以下、（54）も同様である。
[20] しばしば日本語学習者の発話データには、従属節の主語の省略・非省略以外の問題も認められる。本研究では、より自然な例を示すため、そうした点も含めて修正している。以下、（66）（69）も同様である。
[21] この上級日本語学習者は「ケン」と言ったが、「キー」の誤りだと思われる。
[22] この調査者は「大きいんですか」の主題「湖（は）」を省略している。
[23] この上級日本語学習者は「今のところ」と言ったが、「今住んでいるところ」の意味だと思われる。
[24]この上級日本語学習者は「私は日本に行きたいですがーあの比較文化比較文化に興味があります」と言ったが、下線部のあとの文脈を見ると、「日本に行きたいんですが、なかなかチャンスがありません」ということを言いたかったと思われる。

参考サイト

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I−JAS) https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ijas-search-info.html

「筑波日本語テスト集 | TTBJ」 https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/p1.html

「日本語テストシステム J-CAT」 https://j-cat.jalesa.org/?page_id=168

参考文献

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店

柴谷方良（1985）「主語プロトタイプ論」『日本語学』4（10）,pp.4-16,明治書院

柴谷方良（1989）「言語類型論」太田朗（編）『英語学大系 6 英語学の関連分野』pp.1-179, 大修館書店

砂川有里子（1990）「主題の省略と非省略」『文藝言語研究　言語篇』18, pp.15-34,筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻

中西久実子（2023）「日本語学習者による主題の「は」の不使用の実態とその使用意識－なぜ日本語学習者は主題を過度に省略するのかー」『日本語文法学会　第 24 回大会発表予稿集』pp.153-160,日本語文法学会

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 7　第 12 部談話　第 13 部待遇表現』くろしお出版

野田尚史（1996）『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版

野田尚史（2002）「1 単文とテキスト」『日本語の文法 4 複文と談話』pp.3-62, 岩波書店

野田尚史（2004）「見えない主語を捉える」『言語』33（2）,pp.24-31,大修館書店

付改華 （2020）「中国語を母語とする日本語学習者の主語省略の習得について－主題予測性をめぐって－」『言語の普遍性と個別性』11, p.91-100, 新潟大学大学院現代社会文化研究科「言語の普遍性と個別性」プロジェクト

益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版

三上章（1960）『象ハ鼻ガ長イ』くろしお出版

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

宮島敦子（2018）「文章表現と会話における日本語の主語の省略」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』44,pp.103-133,東京外国語大学留学生日本語教育センター